大矢博士『隋唐音図』の再検

――その等韻図的性格――

三沢諄治郎

緒言

一、大矢博士はその著「韻鏡考」（大正十三年印行）の附録として「隋唐音図」一巻を作られたが、これは博士の没後、昭和七年に著作者の自筆版下によって写真印行せられた。一名を「大矢韻鏡」という。この隋唐音図の目的とするところは、その「例言」によれば、

「本図は韻鏡考の所論に基き、韻鏡七音略等の宋代の音図の上欄を集めて之を折衷し、以て一の空窠図を作り、之に広韻の音頭を配列せるものにして、即ち之を以て宋代の音図なる韻鏡に代へて、我が国の漢音に適用せんが為に新に作成せるものなり。」

とあり、又、同趣旨のことが韻鏡考の概括の章（二一八頁）に、

「乃ち宋代諸音図の諸式を集めて一の空窠図を製し、之に記入するに広韻中なる、正しく祥符以後の増加と見ゆるものを省き、その他の音頭を以てし、遂ひに韻鏡に代へて我国の漢字を律し得べき一図を成すに至る。附録隋唐音図即ち是なり。」

とある。更に本図「例言」の終りに、

「此の音図の用は、隋唐の音を伝へたる漢音記例を検索し、傍ら呉音にも及び、又反切によりて、或る文字の音図上の位置を知り、正しき韻形、音尾等を知るに適せしむるに在り。故に其の用法は、我が国の字音よりすると、反切よりするとの二途ありと為す。乃ち毎転字下に広韻の反切上下字を注し、平安朝中期より鎌倉時代に至る間に成れる古

写本に見えたる漢音を右側に呉音を左側に記したり。」

とあるのによって明らかに知ることができる。博士は「広韻」の反切は「唐韻」に多少の増加を行ったもので、広韻の反切は即ち隋唐の字音を表現するものと言ってよいから、これを図上に盛り、之に隋唐の音を伝えた日本の漢音を記入すれば、大よそ一貫した理法を観取し得ると考えたのである。従って、吾々がこの音図に対する観方にも自然に二つの観点が成立つと考えられる。一つは隋唐漢字音（現代では切韻音と呼ばれる。）を処理した等韻図としての観方、他の一つは日本に伝えられた漢字音の性格を検討するという観方である。例えば、某字が何転の何行何等に窠せられているか、そしてそれは正しく隋唐の切韻音をあらわしているかどうかを知るのは前者の観方で、某字の漢音又は呉音が如何に訓ぜられているか、而してそれは他の字音と如何なる関係にあって、果して経緯的理法に合しているかどうかを探るのが後者の観方であり、両者はもとより密接な関係の上に立つものである。吾々がこの音図を借りて学問研究に活用せんとする時、嘗て博士が苦心して行われた中世以上の漢字音仮名づけが果して正しいかどうかを再検討する必要が或はあるかも知れないが、そういう仕事は私などの立場や力量では不可能に近いことであるから、これは他に適任の人もあろうし、今は音図の記載を尊重して行くとして、他の一面、即ちこの音図が等韻図として如何なる性格をもっているかについての検討は、この図を一箇の等韻図として反切その他の目的に利用する場合や、或はさし当って漢音仮名づけの合理不合理を検する上にも一応は済ましておかねばならぬ作業であると信ずるから、ここに微力をかえりみず、全巻の、主として窠字（帰字・音頭・字頭などいろいろに呼ばれる。）の在り方について大よそを検討して見たいと思う。

二、本図には、巻末に附録編纂者（三宅武郎氏）の手によって詳しい校訂札記が置かれてある。音頭の字形と反切を一々広韻に念照せられたので、この「校札」にすでに注記せられた事項は、今再び之を繰返さぬことを原則とした。然しながら、それが重要な事項で、或は小考を加える必要のあるものは煩をいとわず之を掲記し、これはすでに校札に在る旨を書添えることにした。

三、本図の全巻を通じて「広韻」（沢存堂本を以て代表とする。）に比校するに、省略除外せられたと認められる音頭七十八字、何故か知らぬが脱落したと認められる音頭百二十一字、又、広韻の音頭には見えず、集韻その他から補ったと考えられる窠字が十三字、開合その他の関係で同字同反切の字の二重に掲記せられたのが二十七字に上る。

四、本図中に、窠字に対する切語の全く洩れたのが二十八字ある。その一々は三宅氏の校札に詳しいが、それに洩れたものも三字ほどある。切語の洩れた原因は疑問乃至問題となる反切の場合もあろうし、全くの失念によるものもあるようだ。全体として此の図は一たん成稿した後、つぎつぎ疑問の箇所の補訂を進めつつ遂に完成の筆を擱かぬうちに易簀せられたのであるらしく、全巻苦心のあと歴々たるものが観られる。かく尊敬すべき先学の遺業に対し無遠慮な批評を加えることは実に忍びない所であるが、学問研究のために敢えて卑見を述べ世の識者の教を乞わんとするものである。

◎故宮博物院景印宋跋本「唐写本王仁昫刊謬補缺切韻」をこの篇中に引用した場合（李栄、切韻音系によった。）今便宜上「王三」と簡称した。

◎本書には現行活字に無い難字が多いのでそうした文字は《1》《75》の如き数字を以て示して置き、篇末に凸版を以て相当する字体を出した。一々対照を乞う。

〔巻　頭〕

(1) 本書の転図は韻鏡の旧に従ったとある。（例言および「韻鏡考」七〇頁）然るに実際には《佳》韻に属する第十五・十六両転を《咍皆齊》の前に次して、第十三・十四転とした点が韻鏡と（および七音略とも）相違して居り、目次も亦これに同じい。思うに広韻の韻順の《齊佳皆灰咍》とあるのに従ったのであろうか。それならば《蒸登》も亦広韻に従って《侯尤幽》の前に位置せしむべきであったろうにと思われる。巻頭の「内外転図」によれば《佳》韻の転次配当は韻鏡と同様になっている。又、例言の中に「蟹摂十三転」とあるのは本図の第十五転に当るなど前後吻合しない。

(2) 巻頭の「内外転図」は、字音の体韻の撮口張口の別によって内転・外転に分類したので、博士の所謂宋代韻図たる韻鏡・七音略において内転としているところの「宕摂」「果摂」を変えて外転に属せしめている。

(3) 反切検例の説明中、第三項に「二等四等音母」とあるのは明らかに「二等三等音母」の書誤りと見られる。（校札の通り。）

(4) 又、二等音母は他母の二・三等の文字を下字とするのを常例とするが、時に他母の四等を用いることがあるとして挙げた二例のうち、第二転二等の《1》職勇（広韻に《2》に作る）をあげたが、この反切上字が三等の正歯音照母に属す

ることは右の表を見ても、又、第四十二転を検しても明らかなことで、この反切は「腫、之隴切」と重紐になるが故に、陳澧は増加字と見て之を省いている。韻鏡ではこの窠（即ち清母四等）には《2》と同字で且つ字子にあたる《3》を置いているが、これは広韻に示された又音の「且勇切」に依ったものと思われ（磨光韻鏡はこの切を採った。）「且」は四等音母、「勇」も四等字であるから帰字たる《3》が四等のこの窠に在るのは当然である。大矢博士が《2》を「職勇」の反切で四等に置いたことは妥当と云えない。この字については「韻鏡考」一七八頁にも「正音憑切門法」の例として挙げてあるが次頁の図表の方には脱落している。むしろ脱落した方が正しいと云わねばならぬ。同じく、

第六転、二等の　師疎夷

は珍らしい例であるけれども、元来、内転の歯音に於いては二・三・四等とも同じ軽韻に属し、反切上字の「疎」が二等音母であるがために帰字「師」を二等に窠したまでである。（拙著「韻鏡入門」七二頁参照）「韻鏡考」の一七八頁で同じく正音憑切門法の例に挙げた第三十一転「莊、側羊切」もこれと同趣である。

(5) 同第六項（その頁の十行目）、喩母二等とあるのは三等の誤である。（これも校札に在り。）

(6) 「隋唐音図目次」のうち「臻摂」の第十七転は内転とあるが本図では外転とあり、第十九転も内転とあるが本図に書落している。

(7) 同じ「目次」のうち、第十四転入声欄三等に寄韻の《廃》を脱して居り、又、第二十九・三十転の《麻馬禡》が何れも二等欄に位置すべきを三等欄に置いたのは全くの筆誤と考えられる。

(8) 同「目次」のうち、第三転《江》を「開合」と標したのは「内外転図」および本図に「開」としたのと一致しない。

〔本　図〕

(1) 本図の形式で注目すべきは「明微母」を重唇音に置いたこと、「来母」に「舌歯音」、「日母」に「歯舌音」と標したことである。

(2) 本図に於ける唇音字の記載の仕方は、切語上字が軽唇音字である場合は窠字を小字で記し、然らざるものは大字で書いて居り、それは必ずしも三等欄に限らないのである。而して通巻、唇音清濁行（明微母）はすべて重唇音と見て之を

大字で書いて居る。

(3) 又、唇音以外でも博士の軽母と考えられた切語上字を有つ文字は之を小字で書いている。例えば第一転で舌音の「中」以下の諸字、歯音の「崇」「終」など、第五転で喩母の「為」などである。

〔第一転〕

○広韻入声《屋》韻に見える「《4》渠竹切」を脱し、広韻に見えぬ「《5》渠公切」「《6》丑衆切」を入れた。《5》は五音集韻に、《6》は集韻に字頭として掲げて居り、「磨光韻鏡」が之を補っているものであるから、「隋唐音図」は広韻に拠ると云いながら磨光に従うところが多いのではないかと一応疑われる。七音略に《6》はあるが《5》は無い。

○喉音去声喩一に置いた《7》は沢存堂本広韻に「子仲切」とあるが、これは誤で、明内府本・顧亭林本・曹楝亭本ならびに集韻に「千仲切」とあるのが正しいと陳氏は訂している。然るに本図で之を喩母に置いたのは、やはり、「磨光韻鏡」に倣ったものと考えられる。周祖謨「広韻校本」でも「千仲切」を採り、七音略も之を歯音次清四等に窠している。

○牙音去声四行三等の「《8》牛仲切」は広韻に見えず、磨光が玉篇に拠ったのに従った。

＝第二転以下第四十一転までは印刷の都合上省略す＝

〔第四十二転〕

○唇音去声「凭」を二行三等に窠したが「皮證切」の反切から推して、諸書の如く三行三等に在るを可とする。（校札にあり。）

○牙音平声《登》韻の《9》は広韻に《10》とあるのを正しとする。《9》は広韻に「恒、胡登切」の字子である。思うに《10》と同行ですぐ上に在るのを写し違えたのであろう。

○歯音上声《拯》韻の「拯」は切韻・広韻・集韻ともに無切語で、ただ「蒸之上声」とのみ注せられている。「磨光韻鏡」は礼部韻略によって「之《11》」の切語を附した。本図は恐らく磨光を襲ったのであろう。

○喉音平声二行三等の「興」に「許膺」の反切を注したが、広韻に「虚陵切」又「許應切」とあり、本図は又音を誤り引いて「許膺」としたものと思われる。他に依り所は考えられない。

○広韻の入声《徳》韻に見える「劾、胡得切」を脱している。

〔**第四十三転**〕

記載すべき事項なし。

総　　括

以上、本図の窠字の在り方について検討を加えた結果、これを綜合概括すること次の如くである。

〔**総　字　数**〕

全巻を通じて窠に盛られた字数は三千七百十五字。これを沢存堂本広韻の音頭と比較するに、緒言にも一言したように

(イ)、広韻の音頭で本図に脱落しているもの　一二一字。

(ロ)、同じく省略せられたと認められるもの　七八字。

(ハ)、広韻の音頭以外の字を収めたもの　一三字。

(ニ)、同字を重出したもの　二七字。

依って広韻の総音頭数三千八百七十四字から、(イ)(ロ)を引去り(ハ)(ニ)を加えると正確に三千七百十五字となる。

〔**窠字の位置の正しからざるもの**〕

次に、この再検作業の眼目たる、等韻図として不合理なる窠字の有無を検するに、

（㉑と記したのは第二十一転を意味する。以下之に倣う。）

(一)　韻母の所属を誤りたるもの。（六字）

㉑《12》＝《阮》韻に在るは誤。　《13》韻が正しい。

㉑《14》＝《月》〃　〃　《15》〃　〃

㉒《16》＝《元》〃　〃　《仙》〃　〃

㉕　擾　＝《巧》〃　〃　《小》〃　〃

㉝《17》＝《陌》〃　〃　《昔》〃　〃
㉝《18》＝《陌》〃　〃　《昔》〃　〃

以上六字はすべて「等位」を誤った結果と見ることができる。

(二) 四声の所属を誤りたるもの。（一字）

⑰ 鎮 ＝（上声に在るのは誤、去声が正しい。）

(三) 五音の所属を誤りたるもの。（五字）

(イ) 広韻の反切が正しくないため。

①《7》＝（喉音に在るのは誤、歯音に在るべし。）

(ロ) 単なる過誤。（或は何等かの音義書に依ったか。）

⑲ 迄 ＝（牙音に在るのは誤、喉音に在るべし。）

㉕ 聊 ＝（喉音に　〃　来母に　〃　）

㉟《19》＝（牙音に　〃　喉音に　〃　）

㊳《20》＝（喉音に　〃　牙音に　〃　）

(四) 清濁行を誤りたるもの。（十字）

（第一清音を一清、第二清音を二清と簡記する。）

④《21》＝（濁音に在るのは誤、二清に在るべし。）

⑭《22》＝（清音に　〃　濁音に　〃　）

⑭ 刈 ＝（濁音に　〃　清濁音に　〃　）

⑯《23》＝（一清に　〃　二清に　〃　）

⑯《24》＝（二清に　〃　一清に　〃　）

㉙ 写 ＝（濁音に　〃　二清に　〃　）

㉝ 打 ＝（次清音に　〃　清音に　〃　）

㊴ 僭 ‖（一清に　〃　次清音に　〃　）
㊶《25》‖（清音に　〃　次清音に　〃　）
㊷ 凭 ‖（次清音に　〃　濁音に　〃　）

(五) 等位の正しくないもの。

等位の正しくないものは(一)「韻母の所属を誤りたる」項に示した六字を除いた外は、必ずしも甚しい誤とは云えないが、今これを三種に分けて見ると、

(イ) 反切上字に引かれて下字の等位に合致せぬもの。（一字）

㉑ 衍 ‖（三等に在るが、四等に在る方がよい。）これは宋本広韻の切語の誤によるもので、「于線切」とあるために上字三等下字四等、この場合上字を尊重して三等に置くのが常識だが、実は切語が「予線切」の誤であるので結局上下字とも四等にあたる。

(ロ) 反切下字に引かれて上字の等位に合致せぬもの。（六字）

④《26》‖（二等に在るが、四等に在るべし。）
⑪ 豫 ‖（三等に　〃　四等に　〃　）
㉝《27》‖（三等に　〃　二等に　〃　）
㉝ 生 ‖（三等に　〃　二等に　〃　）
㉞ 碧 ‖（四等に　〃　三等に　〃　）
㊵《28》‖（三等に　〃　四等に　〃　）

但し、《28》の場合は四等に空欄が無いのでどうしても類隔措置として満足する外はない。

(ハ) 反切上下字何れにも当らぬもの。（一字）

㉚《29》‖（三等に在るが、二等に在るべし。）

これは単なる誤記と見るべきものである。

〔重出字の問題〕

重出の字は二十七字に上るが之を分類すると、

（甲）別転の間に重出
- (A) 開合の差あるもの
  - (イ) 同韻母の内で重出。（十五字）
  - (ロ) 異韻母の内で重出。（三字）
- (B) 開合の差なきもの
  - (イ) 開音同志で重出。（三字）
  - (ロ) 合音同志で重出。（三字）

（乙）同転の内で重出
- (A) 漢呉音の差によるもの。（一字）
- (B) 漢呉音の差か、単なる誤か不明のもの。（一字）
- (C) 単なる誤と思われるもの。（一字）

○右のうち最も字数の多い「甲・A・イ」が、すべて唇音字であることは特に注目を要する。

○李栄氏の研究によると、「同韻母で開と合との差のある場合、唇音に限って開合の差別がない。」ということであるが（「切韻音系」一二九―一三二頁）この説に則れば、右の「甲・A・イ」の十五字はすべて重出の必要が無かったわけで、即ち、

④開、⑤合、《紙》韻

「俾」「諀」「婢」は「韻鏡」「磨光」は「開四」に、陳氏は「合四」に置いたので本図は開と合とに双出したと見える。

⑥開、⑦合、《脂》韻　《旨》韻

「悲」「眉」　「鄙」「《30》」「否」「美」は何れも相互反であるが、韻鏡は「開三」に「磨光」や陳氏は「合三」に置いたので本図は開と合とに双出したと見える。

㉓開、㉔合、《先》韻

「辺、布玄切」は韻鏡にも重出せられて居り「磨光」は集韻から「卑眠切」を借りて「開」とし、陳氏は徐氏音「布賢切」によって「開」とし、七音略も開に出した。然し、下字の「玄」は明らかに「合」の字なので本図は韻

鏡によって双出したと見える。

㉟開、㊱合、《迥》韻　《麦》韻

「《31》」「並」「茗」　「《32》」「麦」は韻鏡「磨光」は「開」であるが、反切下字が皆「合」なので陳氏は「合」とした。依って本図は開と合とに双出したと見える。

○異韻母の間で重出したのは、「切韻」時代に区分のなかった韻母に限られている。即ち、

⑰開、《軫》韻　⑱合、《準》韻の間に、

「殞、于敏切」広韻は《軫》韻に収め、下字の「敏」も明らかに《軫》韻の「愍」の字子である。その上「愍、眉殞切」で相互反になる。これと「窘、渠殞切」と、以上三字の開合分別は諸書によって混沌としているから左に表示して見よう。切韻の反切は「殞、于閔反」の外「愍」「窘」は広韻と同切。而して「閔」は「敏」と同音である。

韻図・韻書	小韻			
韻鏡	軫開	殞（字于、隕・愼）	軫開	軫開
七音略	軫（愼）開、準（隕）合		軫開	準合
広韻	軫		軫	軫
礼部韻略	軫		軫	軫
集韻	準		準	準
切韻指掌図	準合		準合	ナシ
四声等子	ナシ		軫開	準合
切韻指南	準合		軫開	準合
音韻日月灯	（軫準）合（羽敏）		（〃）開（眉隕）	（〃）合（巨隕）
陳氏切韻考	軫合		軫合	軫合
隋唐音図	軫開・軫合（重出）		軫開	軫合

以上により集韻以後三字の韻母が移っていること、韻鏡と陳氏との開合が正反対になっていること、「磨光」は両者の中間に在ることが知られ、而して本図が大体「磨光」七音略および陳氏切韻考の方法を勘案し、《軫》韻の開合として双出したのは独自の扱方である。

⑰開、《震》韻　⑱合、《33》韻の間に、

「《34》、九峻切」広韻は《震》韻の韻末に収めているが、反切下字の「峻」は《33》韻に在るので、広韻の誤区分であろうといわれている。切韻には《震》《33》の区分が無く、すべて《震》韻で反切は広韻と同じく「九峻反」である。この字を、

○開とするもの＝韻鏡・切韻指掌図

○合とするもの＝七音略・四声等子・切韻指南・磨光。（其他はこの字を掲げていない。）

本図が《震》韻の開口・合口として双出したのは独自の扱方である。

⑰開、《質》韻　⑱合、《術》韻

「《35》、于筆切」

○開とするもの＝韻鏡・「磨光」・陳氏切韻考。

○合とするもの＝四声等子・切韻指南・音韻日月灯。

○開合重出するもの＝七音略・隋唐音図。

なお本図は漢音に「イツ」「キツ」、呉音に「イチ」「キチ」二音を記録しているから開合双出の有力な資料となる。

○開転同志で重出したものは凡て異韻母に渉っていない。

㉑開・四等　㉓開・三等《薛》韻

㋑「《36》、并列切」　㋺「瞥・芳滅切」　㋩「滅・亡列切。」

右のうち㋑㋺は韻鏡でも重出しているが、それは㉓転の同じ四等に置いたので《屑》韻母に誤入の形となり問題にならぬ。本図は一応諸書と同じく㉑転に置いた後、反切下字の「列」が㉓転の三等に在るのでそれに横呼を叶えるために重出したのであろう。それにしてもそのため本来㉓転の第一行三等に在るべき「《37》、方別切」の窠を奪って

しまったのは遺憾である。

○合転同志で重出したもの。

⑱合、⑳合、《物》韻

「屈」　⑱（寄韻）区勿切、　群母。

⑳　区物切、　溪母。

右は⑱転の方が「磨光」を誤解して重出したものと思われる。

㉒合・四等　㉔合・三等　《薛》韻

「《38》、丑悦切」は上字が二・三等の軽母、下字が㉒転の四等字なので双出したものと見える。

㉘合・一等　㉚合・三等　《戈》韻

「《39》、子《40》切」は上字一等、下字三等なので双出したと思われる。

○同転内で重出したもの。

(A)　漢呉音の差によるもの。

㉛　舌音（泥母）
　　歯音（日母）　「壌、如両切」（ヂャウ／ジャウ）

(B)　漢呉音の差か単なる誤か不明のもの。

㉔歯音第二行
　　歯音第五行　「《41》、昌悦切」（セツ／セチ）

(C)　単なる誤と思われるもの。

②唇音第一行
　　唇音第二行　「《42》、方用切」は第一行に在るべきで、第二行に重出したのは誤と考えられる。

〔脱落字〕

「広韻」の音頭で本図に掲記せられぬもののうち、重紐・重稟・韻末増加字とも思われぬもの百二十一字を今「脱落

字」と称するが、それが何故に脱落したかは明らかでない。その数の多い点から見て決して全部が遺却せられたのではあるまい。「広韻」よりも字数の少ない「礼部韻略」に従ったか或は切韻図たる「切韻指掌図」・「四声等子」などに拠ったかと考えて照合して見たが、大半符合せず、又、漢呉音不明のものかと見るに「深」「朕」「諂」などの普通字があり、脱落の真意を捕捉するに苦しむ。左に「脱落字」の全部を掲げ、且つ本図上、当然納まるべき窠を指摘して後日考察の資に供したい。（「舌去二ノ三」は「舌音去声第二行三等」、「来平三」は「来母平声三等」を意味する。）

①鞠（牙入三ノ三）②湩（舌去一ノ三）　雍（喉去一ノ三）　續（齒入五ノ四）③講（牙上一ノ二）
絳（牙去一ノ二）　覺（牙入一ノ二）　殼（牙入二ノ二）　嶽（牙入四ノ二）　淙（齒去三ノ二）
⑥梨（來平三）　歆（喉上一ノ三）　鼐（喉去二ノ三）　二（日去二）⑦蕤（日平三）
蕊（日上三）⑫廚（舌平三ノ三）　矩（牙上一ノ三）⑬滯（舌去一ノ三）　跇（舌去二ノ三）
猘（牙去一ノ三）　偈（牙去三ノ三）　崖（牙平四ノ二）　蔽（唇去一ノ四）　滅（唇去二ノ四）
獘（唇去三ノ四）　袂（唇去四ノ四）⑮陪（唇平三ノ一）　計（唇去一ノ三）　契（牙去二ノ三）
寨（齒去三ノ二）⑯雷（來平一）　膘（來平二）　烓（喉平一ノ四）　睦（喉平二ノ四）
髻（舌上一ノ三）　骰（舌上二ノ一）　魋（牙上二ノ一）　啜（喉去五ノ三 甞芮切）　桂（牙去一ノ四）

嘒（喉去二ノ四）　儐（唇去一ノ四）　㉑莧（喉去三ノ二）　哲（舌入一ノ三）　瘨（牙平四ノ二）　怊（齒平二ノ三）　聯（齒平一ノ二）　絲（舌上一ノ三）　馨（喉平二ノ四）　轟（喉去二ノ二）

慧（喉去三ノ四）　㉗灰（舌去二ノ三）　㉘磯（唇入四ノ二）　屮（舌入二ノ三）　櫃（齒平四ノ二）　韶（齒平五ノ三）　虧（牙去四ノ三）　㉚髽（齒平一ノ二）　荆（喉平三ノ四）　㊲滉（唇平三ノ三）

㉗銀（牙平四ノ三）　㉘槻（齒去二ノ二）　㉓齺（牙入四ノ二）　轍（舌入三ノ三）　還（喉平三ノ二）　㉕祧（舌平二ノ四）　妖（喉平一ノ三）　耀（舌去二ノ四）　㉛狙（齒上一ノ二）　敖（喉入三ノ二）　㊳紂（舌上三ノ三）

新（齒平四ノ四）　㉔邉（舌上三ノ三）　㉖祧（舌入二ノ三）　㉙燎（來平三）　㉛託（舌入二ノ一）　㊱寂（齒入三ノ四）　㊴充（齒平一ノ二）

鼓（喉平一ノ三）　㉘鷷（齒平三ノ四）　㉚駷（舌去一ノ三）　㉜脩（喉入二ノ二）　趫（牙平二ノ三）　㉝饒（日平三）　㉟些（齒平四ノ四）　㊱星（齒平四ノ四）　㊲擣（齒入一ノ二）　深（齒平四ノ三）

諶（齒平五ノ三）　蹗（舌上二ノ三）　朕（舌上三ノ三）　坅（牙上二ノ三）　吟（牙去四ノ三）

譖（齒去一ノ二）　湁（舌入二ノ三）　韌（齒入四ノ四）　熠（喉入四ノ四）㊴　覘（舌平二ノ三）

諂（舌上二ノ三）　颱（齒上一ノ三）　奄（喉上一ノ三）　冉（日上三）　顗（喉去二ノ一）

鰨（喉去一ノ二）　悍（喉去一ノ三）　傔（牙去二ノ四）　紉（牙入一ノ三）㊵　姏（唇平四ノ一）

擔（舌平一ノ一）　贛（喉平二ノ三）　尖（齒平一ノ四）　籤（齒平二ノ四）　潛（齒平三ノ四）

毅（齒平五ノ四）　喊（喉上二ノ一）　憨（喉去三ノ一）　脅（喉去二ノ三）　脅（喉入二ノ三）

劾（喉入三ノ一）

〔切語が広韻と相違するもの〕

大矢博士の用いた「広韻」は明内府本の系統であるように思うが、今詳しく考えるいとまが無い。ここでは「沢存堂本広韻」を以て本図の反切を校合し、苟も差異あるものは悉く掲記したつもりである。これは本図に附せられた三宅氏の校札と重複することになるが、所用の広韻が同一でないかも知れぬし、校札に見えぬ事項も多少ある。又、広韻そのものの反切の誤もあるわけだけれども、それは別途に考えるべきものであるから、ここには気のついたものを掲げるにとどめた。（括孤の中は広韻のもの。）

①豐、敷戎(空) 籠、慮紅(盧) 曨、魯孔(力董) 痛、宅貢(他) 諷、方風(鳳) 趨、香仲(中) 趙、于仲(広子仲は于仲が正)
伏、房木(六)、纖、戚六(側) 囿、於六(于) ②恐(丘)丘用(隴) 隴、力腫(踵、同字) ③龐、溥江(薄) 樁、株江(都) 幢、宅江(宅)
腔、若江(苦) 轃、直降(絳) ⑤騿、之壘(子重)(又音之壘) ⑥尸(広、式之は誤、本図正) 示、神示(至) 懿、乙利(冀) 履、力姊(兀)
⑦悲、卜眉(広、府、新添) 眉、目悲(広、武、目新添) 否、並鄙(広、符、並新添) 媿、俱悸(疋) 悸、共季(其) 敧、楚媿(愧)
⑧菑、測侍(側持) 茬、士持(之) 紀、居里(理) 憙、許紀(記) ⑪貯、知呂(広、丁、知新添) 謂、徐呂(私) 汝、人清(渚) 去、丘倨
(広、欮、近倨誤) ⑫酺、蒲胡(薄) 株、直輪(輸) 拄、知扇(庾) 莫、春蒲、故(薄) ⑬櫟、七懈(広、士誤) 謑、胡礼(広、懈、又音胡礼)
邂、古懈(胡) ⑭識、呼外(會) 槼、楚芮(疋) 肺、芳廢(方) 穢、衣廢(於) ⑮擇、暱皆(広、諧誤、諧正) 犇、楚皆(昌來)
鉥、郎奚(來改) 莅、昌緝(給) 吟、烏代(第) 愷、古亥(苦) 慨、苦溉(広、蓋誤) 賽、先戒(代) 鍛、所戒(拜) 萬、曇(曇)
禮、盧改(啓) ⑯胚、偏杯(芳) 磓、多回(都) 幰、多回(乃) 嚯、藏回(感) 灰、呼快(恢) 禮、柱懷(杜) 磥、落猥(猥)
配、傍佩(滂) 倅、七内(広、士誤) 劌、古衛(居) 稅、舒芮(鋭) 衛、于成(歳) 鯀、徐邁(除) 鸂、烏外(快、又烏外) 夬、古賣
(広古賣誤、邁正) ⑰陳、直刃(珍、又音直刃) 很、胡懇(墾) 笉、古忍(広、士誤、七正) 朮、撫刃(匹)(明本、顧本、撫) 肄、疾刃
(徐、又疾刃) 衅、計覲(許) ⑱瀆、芳魂(普) 論、盧鈍(昆、又盧鈍) 恤、卒聿(辛) ⑲近、巨隱(靳、又巨隱) ⑳芬、撫文
(広、府誤) 訓、許軍(運) 屈、區物(勿) 黷、烏言(閑) 羊、許閑(閒) 浅、七演(広、士誤) 鏔、直鐺(査) ㉒刮、古刹(頡)
拔、寺絶(広、去誤) 鐫、千泉(子) ㉓蓮、力賢(落) 攤、奴丹(但) 鵝、披免(広、被誤) 銑、辞典(蘇) 嬪、祖贊(広、誤、徂正)
遭、持喪(碾) 電、堂甸(練) 塋、普茂(蔑) 結、古結(屑) ㉔黏、北官(潘) 曈、土緩(吐) 叛、蒲半(薄) 篡、志(広、誤)
算、所券(眷) 畹、人滑(絹) 末、莫發(撥) 鮏、五滑(広、骨誤) ㉕焼、式昭(招、又式照) 巧、苦敎(絞、又苦敎) 表、陂嬌
(広、嬌誤、矯正) 少、式照(書沼、又式照) 杳、烏皎(咬) 暴、薄到(報) 巢、士稍(広、七誤) ㉖瓢、符招(霄) 摽、符沼(少)
㉗駝、徒何(河) 奈、奴奈(箇) ㉙楂、鉏如(加) 骼、桔賀(駕) ㉚骫、居靴(去) ㉛藏、昨浪(郎、又徂浪) 穰、汝良(陽)

㔾、良芾(弊)　譍、他浪(丁)　妄巫於(放)　將酋千亮(広千誤、子正)　蹡七良(亮)㉜汪、烏枕(広浪誤)　研、盧獲(穫)
㉝趟、竹交(盲又陟交)　索、色陌(山戟)㉟崢、七耕(広七誤、士正)　檉、丑盈(貞)㊲彄、古侯(恪)　樓、洛侯(落)　湫、在久(尤)
授、承救(呪)㊳滲、所蔭(禁)　寢、士稔(七)　蕈、疎錦(慈荏)㊴合、侯閤(閤)　蓮、七洽(広七誤、士正)　諜、呼懾(牒)
㊵儼、魚掩(広魯誤)㊶芝、敷凡(匹、敷新添)㊷層、作棱(昨又作滕)　興、許贈(虚陵、又許應)　拯、之庚(広蒸之声)　跤、魯劉(鄧)

右のうち「又音」を誤り採ったのが八字、又音によるかと疑われるもの二字である。

〔切語の洩れたもの〕

切語を完全に欠くもの二十八字、半ばを欠くもの二字、この外に第四十転「《43》」は広韻に原来「無反語」であるからこの計算に入らぬ。二十八字は大概「校札」にあるが、三字ほど加えるところもあるから念のため次に全字を掲げる。(△印が新加。)

①閑、禿　②用△(余頌)　⑦衰　⑧恥、起、眙、笥　⑨毅　⑪咀、箸、女、疏　⑬嬭、灑
⑮崴、笓、批、亥、襮、睩　⑯回　⑰殞　㉕嫪△(郎到)　嶠△(渠廟)　㊵歛、跲、殞

半ばを欠くものは次の二字である。

②淞、　⑧思。

〔漢音・呉音の記入なきもの〕

大矢博士は本書の例言の末尾に「呉音は我が国の古書古経巻などの傍訓音注等に示されたる以外に正確なるものなきが故に、音図中に挙げられたる文字中、往々その確かならざるものあり、若し悉く之を附記せんとせば、他字と比較して臆推せざるべからず。是に於いて我が隋唐音図には、古経巻等に現れたるもの以外は強ひて記さざることとなせり。縦ひ記す

ことあるも類推疑ひなきものに限れり。読者中呉音にして確かなるものを実見せんをりには之を補はれんことを希ふものなり。」と漢呉音記載の態度を明らかにしている。今本図中に漢音・呉音の記入なき帰字を列記して後日の参考としよう。

(A) 漢音・呉音ともに記入なきもの。（十六字）

①（平）崇、隆、戎　（去）《44》《45》（入）肉。

④（上）《46》＝（重出字、一方には記入しあり。）

⑦（去）酔、⑧（去）試、⑪（平）余、⑮（上）邸、

⑱（上）《47》　㉔（入）《48》　㊳（上）《49》　㊲（入）謬、㊵（平）《50》

(B) 漢音の記入なきもの。（六字）

②（平）《51》《52》、　⑤婢（重出字、一方には記入あり。）

⑱（上）《53》、　㊲（去）呪、㊸（入）域。

(C) 呉音の記入なきもの。（三十六字）

①(平)蟲　③(平)膿、囱(去)胖、贅、蒼、幢(入)剝、璞、雹、吒　⑤(平)劑(上)跬

⑥(平)毗　⑦(去)媿　⑧(上)齒(去)哉　⑭(上)艹(去)祓、娧、兌　⑮(上)敷　⑯(入)黯

⑱(平)脣　⑳(去)盆　㉑(去)譴　㉓(上)典　㉔(平)潘　㉝(去)倀　㊱(去)甯

㊷(上)廖(入)陟、勦、敕、濮、聖

右合せて五十八字。

〔**広韻の音頭以外から採入れた字**〕

右については一々本図検討中で指摘したから、左にその帰字を列記するにとどめる。

(A) 集韻の音頭と切語を採ったもの。（九字）

①𩜁（丑衆）②娖（尺足）集匀は又足切、磨光、尺足と誤り、本図はこの誤を襲う。③㩉（普講）惟（尼巷）匀竟は脽。⑮恬（布亥）匀竟は佸⑳輑（虞云）攜（拳蘊）集匀、磨光は切語、拳蘊。㉑屣（初莧）㊲浮（普溝）

(B) 五音集韻の音頭と切語を採ったもの。（一字）

①《5》（渠公）この字「集韻」の音頭には無い。

(C) 玉篇の切語を採ったと思われるもの。（一字）

①《8》（牛仲）

(D) 広韻の又音を採ったもの。（一字）

㉖《54》（盧晧）広韻に「《54》、張絞切、又、盧晧切」とあり、「老、盧晧切」の字子にあたるもの。《巧》韻の欄に在るべき字ではない。

(E) 出所不明のもの。（一字）

㊲舊（戸救）

計十三字、そのうち（A・B・C）の十一字はすべて本図が「磨光」を襲ったと考えられる。

〔省略字〕

広韻の音頭で、種々の事情から本図に省略削除せられたと見られる文字七十八字を左に掲げる。

(A) 明らかに重紐のため削除せられたと見るべきもの。

⑦瞃⑧蔡、眹、抾、俟⑬剿⑭囁⑮啡、揆、腴⑯潰⑰苗⑱殳⑳豻
筋㉔鬢㉘諧、磋㉙槩㉛顙㉝韄㊱繃㊲恒㊴鍼、鬣、兼、諜、唈㊵暫

(B) 同反切のため。
㉘棧、㊴《55》

(C) 其他の事情に属するもの。即ち(イ)等韻図式の型が窮屈なため。(ロ)反切下字などの関係から当該の転に窠するを不当と考えられる。(ハ)韻末増加字と認めた。(ニ)誤って他の字に窠を奪われた、等である。

④枳、企⑥跱⑬慘⑭啐、膳⑮啐、贄、杪、遂⑰剡、蹴⑱趣、吩、晞、濜
展、螼、猶㉑戲、齾㉒苗、簸㉓棳、剃、鬩㉔恮、撰、孖、厰、啜、慬
㉗侉㉘伽、佉、脞、沿㉜罪、喋㉟歡㊲嵫、糝㊳歛㊴襶、萐㊵砝㊶葵

〔其の他〕

最後に、広韻と本図との音頭文字の相違は可なりあって「校札」の中にも注記しあり、又この篇中でも折々これに触れたが、この問題は吾々の目的にとって余り重要でないと思うので、ここでは深く追求せぬこととした。

難字表

《1》惚《2》惚《3》忪《4》騛《5》頑《6》矗《7》趙《8》岍《9》峘《10》拒《11》庱
《12》楩《13》獮《14》髯《15》鐫《16》雚《17》黐《18》彳《19》瞁《20》廠《21》躚《22》鄣

《23》𡸁《24》嗺《25》凵《26》厜《27》瀙《28》殑《29》諉《30》鄣《31》頩《32》擐《33》稕
《34》呁《35》颭《36》鷩《37》筋《38》皷《39》侳《40》鼩《41》歠《42》葑《43》黰《44》聚
《45》剬《46》諀《47》穄《48》茁《49》侳《50》舑《51》形《52》賨《53》緦《54》貚《55》逡

（一九五四年八月初稿）